

これが読みたい

歌人 佐佐木 幸綱

私たちが現代日本人の心に思い浮かべられる万葉集は、明治期に発

明された万葉集なのだという。実態とはずいぶんかけはなれた万葉

「国民文学」誕生のなぞを解く

集。明治期に発明されたイメージとしての万葉集が私たちの頭脳にインプットされてしまっているのだという。『万葉集の発明』は、

そんな近現代の日本人のこころのふるさととしての万葉集の出所と展開を跡付けた労作である。とにかくおもしろい。東歌を民謡と見る志田義秀「日本民謡概論」に対する見解等、万葉集自体の研究をしてきた著者ならではの鋭い踏み込み方である。

それに対抗しうる国民文学が日本にもほしい。そうした文脈のなかで「素朴……」「天皇から……」の万葉集が発明されたと指摘する。万葉集それ自体の読みの問題をふくめて、問題の根は深い。日本人のアイデンティティーの問題、教育の問題……。ここで掘り起こされた話題は、今後論議を呼んでゆくだろう。

『現代俳句の鑑賞101』は、一八九九年生まれの五十嵐播水から一九六八年

真率」である。万葉集は「天皇から庶民まで」の歌を集めた日本最古の歌集である。この説明の仕方はさかのぼってゆくと明治二十年代になるのだという。明治の知識人たちは近代化を急ぐなかで、民族の原郷、日本国民の精神的統合のシンボルを求めていた。イメージにあったのは、ドイツにおけるゲーテやシラー、イギリスにおけるシェークスピア。

選で、昭和三十年代以後生まれの俳人が十人ほど入っているのがありがたい。句集『火球』は著者の第四句集。意外な取り合わせと、さりげない軽みが新鮮。

子燕の口あけどほし銃器店
号泣の人の背中秋の蠅

詩歌

- ◆万葉集の発明 品田 悦一著 (新曜社・3,200円)
- ◆現代俳句の鑑賞101 長谷川 權編著 (新書館・1,600円)
- ◆火球 大木 あまり著 (ふらんす堂・2,600円)

